次の古文は、『おくのほそ道』の【A】冒頭と【B】「平泉」である。読んで、あとの問いに答えなさい。

【A】月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。1舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にａさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心をｂくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

表八句を庵の柱に懸け置く。

【B】三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。ｃまづ高館に登れば、北上川、南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。2「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打ち敷きて、時の移るまで泪を落としはべりぬ。

3夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな　曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の叢となるべきを、四面新たに囲みて、甍を覆ひて風雨をしのぐ。しばらく千歳の記念とはなれり。

4五月雨の降り残してや光堂

（『おくのほそ道』による）

（注）【A】百代の過客＝永遠に旅を続ける旅人。馬の口とらへて＝馬のくつわを取って（人や荷物を運ぶ馬子の仕事）。古人＝昔の詩人や歌人。予＝わたし。片雲＝ちぎれ雲。漂泊＝あてもなくさまようこと。江上の破屋＝川のほとりのあばら家（芭蕉の住まい）。白河の関＝今の福島県にあった関所。そぞろ神＝人の心をそわそわさせる神。道祖神＝旅の安全を守る神。股引＝ズボンのような衣服。三里に灸すうる＝ひざの下のつぼにお灸をすえる（足を丈夫にするため）。住めるかた＝住んでいた家。杉風＝芭蕉の弟子。別墅＝別荘。表八句＝連句の初めの八句を書いた紙。

【B】三代＝藤原清衡・基衡・秀衡の三代。栄耀＝栄華。一睡のうち＝ひと眠りの間の夢のように、はかなく。こなた＝手前。高館＝源義経が住んでいた館。泰衡＝秀衡の子。夷＝北方の人々。義臣すぐつて＝忠義の家来をえりすぐって。功名一時の叢となる＝手柄を立てたのも一時のことで、今は草むらとなっている。笠打ち敷きて＝笠をしいて（すわり）。兼房＝義経に仕えた年老いた家来。二堂＝中尊寺の経堂と光堂。開帳＝ふだんは閉じている堂の扉を開いて、中の仏像などを見せること。三将＝藤原氏の三代。七宝＝金・銀などの宝物。頽廃空虚の叢＝くずれて何もない草むら。四面新たに囲みて＝四方を新しく囲って。甍＝屋根。千歳の記念＝千年の昔をしのぶ記念。

【『おくのほそ道』の旅】一六八九年（元禄二年）の春、四十六歳の芭蕉は、弟子の曾良とともに江戸の深川を旅立った。東北・北陸をめぐり、美濃の大垣に着くまで、旅はおよそ百五十日に及んだ。芭蕉はこの旅をもとに、何年もかけて文章と句を練り直し、『おくのほそ道』を書き上げた。

【平泉と藤原氏】平泉（今の岩手県）は、藤原氏が三代、百年近くにわたって栄えた土地である。源頼朝に追われた弟の源義経は、ここで秀衡に守られたが、秀衡の死後、子の泰衡に攻められて命を落とした。藤原氏も一一八九年に頼朝にほろぼされた。芭蕉が平泉を訪れたのは、それからちょうど五百年後のことである。光堂（金色堂）は、藤原氏の初代、清衡が建てたお堂で、そのころすでに、外側を覆う堂に守られていた。

問一 aさそはれて・bくるはせ・cまづを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

a

b

c

問二 1舟の上に生涯を浮かべと対句になっている部分を、【A】から十三字で抜き出しなさい。

問三 【A】で、旅に出るために、身につける物や自分の体の手入れをしている様子を述べた部分を、本文中から抜き出し、初めと終わりの三字を書きなさい。（句読点も一字に数える。）

初め

終わり

問四 【A】の「草の戸も」の句の季語と切れ字を抜き出し、季節を漢字一字で書きなさい。

季語　　切れ字　　季節

問五 【A】から読み取れる作者の考えとして最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　旅は苦しいので、年をとる前に一度だけ旅をしておきたい。
イ　旅に出て有名になり、多くの人に見送られて旅立ちたい。
ウ　旅先で死ぬのはこわいので、住まいを残して必ず帰ってきたい。
エ　人の一生は旅であり、昔の人々のように旅に生きたい。

問六 2「国破れて……泪を落としはべりぬ」とあるが、作者が涙を流したのはなぜか。最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　杜甫の詩にならって、自分もすぐれた詩を作りたいと思ったから。
イ　長い旅につかれて、江戸に帰りたくなったから。
ウ　栄えた人々の跡が草むらとなり、人の世のはかなさを感じたから。
エ　自分もここで城を守って戦いたかったと、くやしく思ったから。

問七 4五月雨の降り残してや光堂の句の説明として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　五月雨も光堂だけは降り残したのか、光堂は昔の輝きを保っている。
イ　五月雨が激しく降りそそぎ、光堂はすっかりくちはててしまった。
ウ　五月雨がやんで、光堂が日の光を受けて明るく輝いている。
エ　五月雨が降り続いて、光堂を見に行けないのが残念だ。

問八 3夏草や兵どもが夢の跡とあるが、作者はこの句にどのような思いをこめているか。「功名」「夏草」という二つのことばを使って、五十字以上、六十字以内で書きなさい。

解答（答えと短い解き方）

歴史的仮名遣い 発展① おくのほそ道を読む

本文の読解

問一 a　さそわれて　　b　くるわせ　　c　まず

a・b：語の頭以外の「は」→「わ」。c：「づ」→「ず」。

問二 馬の口とらへて老いを迎ふる

「舟の上に生涯を浮かべ」と「馬の口とらへて老いを迎ふる」が、形も意味も対応している（対句）。

問三 初め　股引の　　終わり　すうる（「るより」でもよい）

「股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すうる」が旅のしたく。

問四 季語　雛（「雛の家」でもよい）　切れ字　ぞ　季節　春

「雛」はひな祭りの雛人形で春の季語。「住み替はる代ぞ」の「ぞ」が切れ字。

問五 エ

「月日は百代の過客にして」と、時の流れそのものを旅人にたとえている。

問六 ウ

杜甫の「春望」をふまえたことば（国はほろびても山や川は残り、城あとにも春が来て草が青い）。

問七 ア

「降り残してや」は「降り残したのだろうか」。光堂は囲いと屋根で守られて残っている。

問八 （例）義経の家来たちが功名を夢見て戦った場所も、今は夏草がしげっているだけで、人の栄えや手柄はなんとはかないものかという思い。

「兵ども」は義経の家来たち、「夢の跡」は功名を夢見て戦ったあと。今は夏草がしげるばかり。